様式 C-7-2

# 自己評価報告書

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19529004
研究課題名（和文）
〈結果志向〉〈過程志向〉を再考する-言語・認知・文化的構築物の相同性を求めて
研究課題名（英文）
Rethinking “result-orientation” of English and “process-orientation” of Japanese: Homology of Language, Cognition, and Cultural Construction

研究代表者
八木橋　宏勇（YAGIHASHI HIROTOSHI）
杏林大学・外国語学部・講師
研究者番号：40453526

研究代表者の専門分野：言語人類学・認知言語学
科研費の分科・細目：人文学・言語学
キーワード：結果志向・過程志向・言語・認知・文化的構築物・相同性・事態把握・アスペクト

１．研究計画の概要

本研究は、これまで指摘されてきている「英語は結果を重視」し「日本語は過程を重視」するという傾向を、言語構造の様々なレベル（語・句・文・談話・文化コミュニケーションの各レベル）で再考察し、英語と日本語の言語構造の背後にある思考体系を明らかにすることを目的とする。

２．研究の進捗状況

（１）言語と思考の関係について、従来の言語相対論では､「ある思考が存在するのはこのような言語表現が存在するからである」「ある言語表現が存在するのはこのような思考が存在するからである」という両者を行ったり来たりする循環論法に陥ることが多く、その全体像を的確に捉えることは難しかった。本研究では、「結果志向」と「過程志向」という思考パターンを言語構造（語・句・文・談話・文化コミュニケーションの各レベル）および言語以外の文化的構築物（例えば「絵画」「庭園」「家屋」「教育制度システム」「スポーツ」など）の双方から検証し、主に語彙レベルで論じられることが多かった英語と日本語の「結果志向」「過程志向」をより包括的に検証している。さらに総論としての全体議論を展開することにより、各レベル間の相同性、言語体系全体としての一貫性の有無、言語以外の文化的構築物との相同性について検証を行っている。

（２）現在まで、学会発表において言語構造各レベルが「英語は結果志向」「日本語は過程志向」という相同関係にあることを各レベル複数の事例により確認できている。言語以外の文化的構築物との相同性に関しては、さらに多くの事例を検討し、実証性を高めるのが今後の課題である。

（３）言語の志向性がどのような動機付けで形成されてきたのかという根本的な問題については、言語に先立つ事態把握の傾向性（「好まれる事態把握」）という点から検討している。英語は「客観的事態把握」を、日本語は「主観的事態把握」を好むことは先行研究で言われてきているが、そのような状況の

把握の仕方が、「結果」「過程」とどのように関わっているのかという問題が今後の大きなテーマである。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。

科学研究費補助金の支援により、十分な文献をそろえることが出来ていること、さらに国内外の学会で発表する機会があり、有益なコメントを多くいただいていることが第一に挙げられる。さらに、研究代表者と連携研究者が（隣接諸分野との交流により進展が極めて速い）各々の専門分野に関する最新の動向を分担して把握しており、その知見を適宜取り入れることで、より高度な研究を迅速に遂行することができている。

４．今後の研究の推進方策
（１）原則これまでと同様に各レベルごとの担当を分担して進めていくが、学会発表等で他の研究者と交流し、これまでの研究に関する問題点の洗い出しとその考察・修正を行っていく。
（２）各レベルでの考察を総論として展開させるために、これまで以上に研究代表者と連携研究者が連絡を取り合い、研究の終了に向けて詰めの議論を進めていく。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① YAGIHASHI Hirotoshi. ‘Why Can a Japanese Unagi-Sentence Be Used in a Request?’. *Lodz Papers in Pragmatics* vol.5. No. 2. Pp. 227-240. 2010. 査読あり.

〔学会発表〕（計25件）
①TANI Miyuki, INOUE Ippei, TATARA Naohiro, YAGIHASHI Hirotoshi. Workshop: Is English result-oriented and Japanese process-oriented?: Empirical analyses of “fashions of speaking”. International Pragmatics Association 11th Conference. 2009. Melbourne
②谷みゆき、出原健一、多々良直弘、八木橋宏勇．ワークショップ「英語と日本語の好まれる事態把握―＜結果志向＞と＜過程志向＞の動機づけ―」．日本言語学会第 137 回大会．2008．金沢大学.
③花崎美紀、花崎一夫、谷みゆき、多々良直弘、八木橋宏勇．シンポジウム「日英語における相同性を考える―＜有界性＞と＜無界性＞」．日本英文学会中部支部第60回大会シンポジウム．2008．信州大学.
④多々良直弘、花崎美紀、花崎一夫、谷みゆき、八木橋宏勇．ワークショップ「英語と日本語の＜結果志向＞＜過程志向＞を再考する」．日本英語学会第25回大会．2007．名古屋大学.